

母の 632 ひろば

doshinsha / haha no hiroba

詩／スマレがすき 片山令子 2
 年頭座談会 子どもの本と子どもの現在 いま
 汐見稔幸、代田知子、長野ヒデ子 3-5
 新刊紹介／越水利江子 6
 あまんきみこ、増山均 7

イラスト／和歌山静子



今は昔

辻村益朗

童心社は今年で創立60周年と聞いた。1957年（昭和32年）は、たまたま私も社会人となった年なので、その頃を思い返すと感慨深いものがある。それまでの紙幣にかわって、100円銀貨が発行され、FM放送や、カラーTVの試験放送も開始された年で、街には活気があった。たしかに、当時の流行語「もはや戦後ではない」の時代で、きしのぶすけ岸信介内閣の成立もこの年である。さらに、われわれにとって決して進むべきではない道……東海村の研究用原子炉が臨界に達し、日本に初めて“原子の火”が灯った年でもあった。まさに高度経済成長が始まったばかりの頃である。

そして60年が過ぎた。長い年月にはさまざまな発展や変化があり、出版界もまた同様であった。そのなかで最大の変革、それは「IT革命」と呼ばれたものであった。編集作業、印刷原稿のつくりかた、出版の形態すらも変わり、子どもの本の世界も急激な変化を余儀なくされながら、なんとか対応してきたように見受けられる。

しかし、あらゆるものがIT変革に流されて、「のり矩」をこえたような不安感があることは否めなかった。そこへ、人間の思いとは全く無関係に、突然に、2011年3月大地震が襲った。原子の火の1つ、福島第一原子力発電所では大事故が発生し、その災害は現在も尾を引いている。

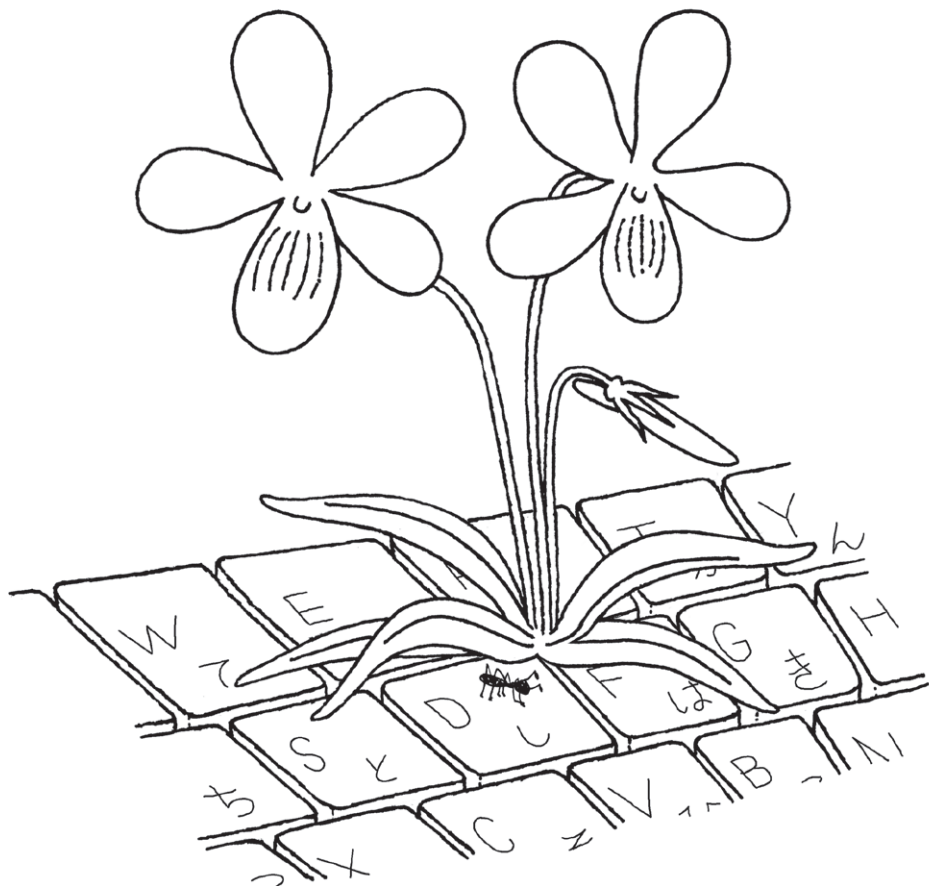
事故から5年が過ぎて何かが変わったのだろうか。あの忌まわしい“火”は、まるで何事もなかったかのように、昨年、せんだい川内原子力発電所では発電を再開した。坂道を転げるように引き返せない世界へと向かっているようでもある。

さらに巷では、多くの人びとが反対していながら、ちまたカジノ法案（通称）も慌ただしく法制化された。意思決定の手段として、多数決を採用しているのだから、正義であるという。これでは、あまりに浅薄な民主主義がまかり通っていると言わざるを得ない。だが忘れてはならないのは、意思決定をしているのは間違いなく、われわれが選んだ人たちなのである。選ばれた人びとの行動が愚かであったとすれば、それは愚民が選んだ結果なのである。

われわれは愚民であってはならない。そのためには、何が必要なのであろうか。なんとなく皆と同じ方向が安心だという風潮から脱却しなければならない。皆が狂気のようにスポーツを応援し、一体感に酔っているような感覚では、未来は見えてこない。戦時中の、教育の愚かさを記憶する人間にとって、戦時の^{てつ}轍を踏むことになるのではないかと、不安である。子ども達に輝く未来を残すためには、いま何が必要なのかを、1人1人が考えなければと切に思う。（つじむら ますろう／装丁家）

どうしてスマレがすきかというと
ちいさいこがそらにてをひろげて
ひとりでさいているようだから。
バスをまつベンチのしたの
いしだたみのせまいすきまや
がいとうのポールのしたに
はなをつけてゆれている
スマレをみつけると
こんなところにさいているって
うれしくなるんだ。
かぜやありがたねをはこんでくれて
スマレはここがすき
とさいている。
まだつめたいまふゆなのに
ことしもベンチのしたに
スマレのはっぱをみつけた。
かわいいスマレ
はながさくのをまつてるわ
おひさまみたいにみつめているよ。

スマレがすき



片山令子

かたやま れいこ / 詩人、絵本作家。

詩集に『夏のかんむり』(地方・小出版流通センター)『雪とケーキ』(村松書館)

絵本に『ようふくなおしのモモーヌ』(のら書店)『ちいさなともだち』(そうえん社)

『マルマくん かえるになる』(ブロンズ新社)『とくん とくん』(福音館書店)など多数。

今、子どもたちが求めている本は？
大人たちは、どんな作品を
手渡していけばいいの。

今回は、子どもの本と読書の現在から、
作家が創作するということ、
そして人の心が育つことまで……。
三人の方に、それぞれの立場から
お話していただきました。



Shionoi Toshiyuki



Shirata Tomoko



Nagano Hideko

子どもたちと、読書の現在

代田 私は図書館で、赤ちゃんから小学
生までの子どもに本を読んだり紹介した
りする機会が多いのですが、子どもたち
の読書傾向から、最近、空想世界やファ
ンタジーを楽しめない子どもが増えてい
るんじゃないかしらと感じているんです。
以前は小学生から、よく「魔法がでてく
るお話を読んで」と催促されたものです
が、今は友だち関係などの現実的なお話
に惹かれる子どもが多いように思います。
たとえば絵本だと、友だちとのけんか
や仲直りを描く『ともだちやもんな、ほ
くろ』のくすのきげのり／作 福田岩緒／絵 ぼ
の社、『くねくんがおれたとき』(かさこ

年頭座談会

子どもの本と読書の現在



教育学者

汐見稔幸

図書館司書

代田知子

絵本、紙芝居作家

長野ヒデ子

まり／作 北村裕花／絵 くもん出版。読み物で
は『くつかくしたの、だあれ？』(山本悦
子／作 大島妙子／絵 童心社)など。子どもた
ちが熱心に聞いている様子を見ると、人間
関係の悩みが重くのしかかっているのか
な……と感じます。高学年以上には、い
じめや虐待を受けている子どもたちが学校
の中で同時に行方不明になってしまう『神
隠しの教室』(山本悦子／著 丸山ゆき／絵 童心
社)が、好評でした。ミステリー仕立
てで読ませるし、誰にも言えずに苦しむ
子どもの心に寄り添い、応援する作者の
想いが伝わってくる作品です。

幼児向けの絵本では、生活を豊かにす
る作品が出ていて一方で、ファンタジー
や物語世界に誘い込んでくれる作品は少
ないように思います。たとえばあまんき
みこさんや、安房直子さんのような……。

幼児は、主人公になりきって全身でお
話を楽しみます。「それからどうなる
の？」と夢中で聞き、挿絵を頼りにお話
の世界をありありとイメージしちゃっ
まったく知らない魔法の国とかでもね。

だから小さいうちに、少し長いお話の
本を、たとえば『エルマーのぼうけん』
(R・S・ガネット／作 福音館書店)などを
読んであげてほしい。「ナルニア物語」
(C・S・ルイス／作 岩波書店)を小学一年と
二年の兄妹に毎晩読んでいて、「うちは
今、ナルニアブームよ」と言ったお母さ
んもいました。子どもは、読み聞かせを

楽しみながら、読む力の根っこ、つまり
見たこともない世界を想像したり楽しむ
力をつけていくのだと思います。

ファンタジーの中で、読者は人の本性
に出会ったり、生きて成長する他者に共
感することができる。作家にはそんな作
品を書いてほしいし、ファンタジーの中
で生きることで、読み手は深い感動や氣
づきが得られることを、子どもたちにも
つと伝えたいんです。

汐見 確かに今の子どもたちは、身近な
人間関係にかなり気を遣いながら、毎日
過(こ)していますね。メールのやりとりで
「今日は〇〇から返事きてない」とか
「□□に返事を書かないと、何を言われ
るか分からない」とかね。以前の子ども
たちとは、少し違うところに関心がある
んです。だから、今の子の持つ不安みた
いなものを越えるくらいファンタジック
な世界というのを、作家もなかなか書け
なくなっているのかもしれない。

身近な人間関係そのものを取りあげて、
そこにちよつとした「本当はこういこと
とができたらいいな」と作者が願うこと
を入れる、という書き方はあるでしょ
うね。それが本格的なファンタジーに結び
ついて、その子の将来の夢や「こうい
う社会をつくってみたい」というところま
でいくといいのですが。

僕は、ファンタジーとは、作品を通じ
て読み手の希望や夢をつくるものだと思

います。作品を読み終わったら、日常にただそのまま戻っていくのではなくてね。

●「誕生」を語り合う「たかび」



代田 この間、親子読書会で小学校一、二年生を中心に『おかあさんがおかあさんになった日』『おとうさんがおとうさんになった日』（共に、長野ヒデ子／さく／童心社）を読みました。「自分がどんな風に生まれてきたのか知ってる？」と子どもに聞くと、「お母さんは感激して、わんわん泣いたんだって」などと、とても嬉しそうに話すんです。

参加しているお父さんやお母さんたちにも、自分が生まれた日の話をしてもらいました。あるお父さんが「僕は難産だったそうです。一番目だから出産は案だと思っていたのにと、親に何度も言われ……。」と。「みんな、難産って知ってる？」「知らない。何？」「ではお父さん説明してもらえますか？」って。そういつかついに、絵本を介して、自分が生まれた時のこと、人が生まれるということ話をし合えたのは、とてもよかったです。

三、四年生を中心に『おとうさんかあさん』（長野ヒデ子／さく／石風社）を読んだときも反響がありました。「ちよー、うける」って。自分の両親が違う人格を持っていて、違う幼少期を送っていて、好みも異なる、そんなことが新鮮で嬉しかった。

たよつです。「この本を見せて、お父さんとお母さんの学校の先生の名前を聞くんだ」と借りていった子もいました。

今、親子の会話が本当に少なくなっていると感じます。図書館に来る親御さんたちも、子どもが「この本、おもしろそう」と話しかけても聞き流し、スマホや雑誌に夢中だったりね。それだけ疲れているのかもしれませんが、せめて本を介して会話が生まれるといいなあと思っんです。

●人の心の世界「I」と「Me」



汐見 人間の心の世界というのは複雑ですよ。でも、ものすごくわかりやすく言うと、「二重構造」になっている。これはミード (George Herbert Mead) という社会学者が言ったのですが、人の心には、中心に「I」の世界がある。これは自分そのもの、生きようとしているエネルギーそのものなんです。

成長するにしたがい、人の心には「Me」の世界ができていきます。「Me」は、社会の要請に応じてつくられていく。「I」がうしたら、ほめてもらええるんだ」とか「人から評価されるんだ」と理解して、社会的な行動様式を身につけ、自分を「コントロールするようになっていく自我です。「I」の中には、人をやっつけてしまふほど攻撃的な本能もある。沢山の人を殺して生きてきた人類だから、私たちの

遺伝子の中には強い攻撃性もあるわけですよ。他方で、人にひどいことをしたら「かわいそう」と感じる共感の本能もある。これは人と協力することで生き延びてきた人間だけの、他の動物にはないすごい感情です。

だから、幼い子と接する時は、最初に共感のスイッチを沢山入れてあげてほしい。たとえば赤ちゃんが泣いたときに「どうしたの？ 眠たいの？ おなかかすいたの？」って親身に接すると、共感された喜びでスイッチが入っていく。共感の意識が育っていくんです。そうすると、たとえ興奮して人に噛みついたり、叩いたりしても、共感のスイッチが入れば、「あ、まさかったかな」「やられたら痛いよね」と、攻撃性がコントロールできるようになってくる。

ただし攻撃性というのにも必要で、これも一つの大切なエネルギーです。たとえば「もつときれいなものをつくらう、もつとかつこいいものをつくらう」なんていう意気込みも、根っこは攻撃性。攻撃性に共感性が融合することによって、文化的なものに育っていくんです。それは社会的に行動する力として「こいつう時は約束を守ったらいんだ」「こんなルールをつくらうたらいいんだ」という風に発展していきます。

しかし、小さい頃から親に「何やってるの！ こつしなきゃだめでしょ」なん



て厳しく言われてルールを敷かれたり、ちよつとしたことでも叱られたり評価されて、子どもが「こつすれば大人がほめてくれる」と早々に学習したりすると、大元の「I」が非常に貧弱なままになる。「I」が豊かになって、そこから「Me」が上手に形をとっていくのではなくて「Me」が最初にウワーツとつくられてしまふ。また「I」と「Me」の境目にある「中間地域」が豊かになることが、人間の自我にとって大切なのに、この「中間地域」も非常に狭くなってしまっんです。

代田さんが紹介してくれた作品の中に、男の子が友だちと一緒に捕まっていたカブトムシを捕る絵本がありましたね。（「ともだちやもん、ぼくら」おじいさんにひびく怒られても「やりたい」ってというのが「I」の心の世界です。ひとときり怒られた後に、木の枝に二人でぶら下がって、夕日が沈んでいくのを見て「今日も楽しかったなあ」なんて言い合う。これは「I」の世界が共鳴し合っている関係だと思っんです。そういう体験が豊かになっていくと、命そのものの世界がワアーツと響き合っっていくんですね。そういう経験が、今の子はなかなか得られないのだけれども。

●何でもないストーリーの中

長野 私は、難しいことはわからないのだけど。人って、身体を持



って生きているのは幼児も大人もみんな同じでしょ。身体から湧き出てくる作品をつくりたいなと思うんです。難しいことをわかりやすく、楽しくね。赤ちゃんから大人までわかる言葉で、わかる絵で表現したいなあといつも思うのですよね。

今、「こいつの風にしたほうがいいよ、ああいう風にしたほうがいいよ」っていう、道徳的な絵本がわりとよく出ていて、現場でも活用されていると思うんですけど、どうも私は苦手なんです。その予自身がそこから、自分から納得して行動できるとかそういうことが大切な気がして、だから、本当に何気ない絵本……。『かこちゃん』（きこたえいこくさく ほりうちせいらいちへくも出版）ってご存知ですか？



カニがすすこ、すすこ、すすこ、本当に言葉は「すすこ、すすこ、すすこ」だけで、砂浜の家で夕日を見て、また、すすこ、すすこ、穴に入っていくだけなのに、それが、ちっちゃい子も大人も、何度読んでも嬉しくなるんですよ。本当に何でもないことなのに、身体が嬉しくなって、自分の力みたくないものが引き出される絵本。

『トラさん トラさん 木のうえに』『アヌシユカ・ラウイシャンカール/作 ブラク・ピスワス/絵 評論社』も、捕まえたトラをみんなでどうしようか相談して「やっぱり迷がそうか」って言って、ただ迷がすだけなの、苦労して捕まえたトラな

のに。何でもないストーリーの中に、すごく大きなものが入っている。そういうものを、つくりたいなとすごく思うんですよ。何の役にも立たないような気がするんだけど、何度もくり返して見て、心に残ったり、大人になってもう一度見たいという。そういう絵本っていうのは、自分の人生の宝物ですよ。

荒井良二さんが最近『きょうはそらにまるいつき』（偕成社）を出しましたよね。あれを見て思い出したんだけど、うちの娘が三歳ぐらいの時にお月さまを見て、「お母さん、アメリカにもお月さまあるの？」って言ったんですよ。「あるよ」って言ったら、「じゃあ、インドにもあるの？」「イギリスには？」というので「あるよ」と答えたら、娘はその三つしか国の名前を知らないから、「あー、みんな一つずつあって、よかったね」って言ったんですよ。すごく嬉しかった。

何でもない日常のことに、少し角度を変えたら新鮮な気持ちで出会えたような……。だからそういう絵本に出会うと「嬉しいなあ」とか、「こついう本ができたらいいなあ」と、思っんです。

いのちが喜ぶかたちと音



汐見 ほくは、『まんまん ぱっ』（長野麻子/ぶん 長野ヒナ子/え 童心社）を読んで、この絵本の「まるるのび」にすごく共感した



んです。赤ちゃんに代わって「このまるるすきな」って言いたいくらい（笑）
今、社会に適応しようとして疲れ果てている大人たち、社会の変なルールばかり押しつけられている子どもたちがいる。でも人間のいのちが本当に求めているのは、もっとこついうまるい、柔らかいものじゃないかって。そこに共感し合える友だち、お母さん、お父さん、先生がいる……。そういう中で、子ども自身のいのちが喜んでいくと思うのですよね。

長野 現代音楽をやっている娘が、音の原点は、私たちが日常の中で身体から出す音だと言います。呼吸の音とかね。そういうものが人の心に一番響くって言うんです。

この絵本に出てくる、赤ちゃんの出す音、「まんまん」とか「ぱっ」は、生まれてきた赤ちゃんが、これから生きていくためにお母さんや周りの大人に向けて発する命の音だと思っのですね。それさえあれば、ものが言えない、動けない赤ちゃんが生きていける。発音上も口が一番出しやすい音。世界中の赤ちゃんが最初に「まー」って言う。もともと命にかかわる言葉を発しやすいように、神さまは口の形をつくられたのじゃないかなと思っ。

汐見 そういえば、絵本にどんな言葉や音が使われてきたかという分析は、あまりないような気がするのですが、いのち

の響きを感じる言葉というのはあります。実は私たちの脳の深部には「これが良い」とか「怖い」とか瞬時に判断する、生物としてのすごい力がある。理屈であれこれ言うのは、後付けで説明しているにすぎないというくらい、最初に感情や情動で判断する。その根っこにはいのち、という働きがあって、そこが本当に喜ぶものが、「いのちが求めているもの」なんです。

身体が気持ちいい、っていう音韻や発声の仕方はあるんです。言葉の「音」の大切さについて、現代ではあまり言われませんが……。赤ちゃんが一番、いのちの求めるものに正直だと思っから、われわれは赤ちゃんに戻らなければいけないね。

代田 松谷みよ子さんの『あかちゃんのうち』（いわさきちひろ/絵 童心社）という絵本がありますね。お母さん自身が詩を楽しんで、赤ちゃんに向けて読むことで、その響きを赤ちゃんが聴いて幸せになる素敵な本。最近、大勢への読み聞かせの機会が多くなっているからか、視覚に強く訴える絵本が多いですが、こついう本の魅力も知って欲しいですね。絵本は一回読んで終わりではなくて、家ではくり返し、くり返し読みますから。最近は何度も読めば即座に反応の返ってくる絵本がも

ってほしいです。

つばさは、ばあばが大好き。
学校から帰ったら、楽しかった事も、悲しかった事も、困った事も、何でも、ばあばに聞いてもらいます。
なぜって、ばあばは、いつでも、「だいじょうぶだよ」って、つばさの頭をなでてくれるから。
つばさは、ばあばが大好き！
でも、そのばあばが、わすれる病気になって……。
いつしか、つばさは、ばあばのそばに近づかなくなります。
ここで思うのは、物語には、嘘（フィクションとも言う）があってもいいということです。そこに真実が秘められてさえいればいいのです。
絵本や童話、小説も、そういうものだと思います。
ことに、老いや死、さらに老いによる認知症などの病を、真実のまま書いて絵本にしても、書く人も読む人もただ辛いだけ。だから、最も嘘を書いてはいけない人生の重い体験の物語ほど、素敵な嘘をつかなくてはならない場合もあるのです。
けれど、この物語には、目につくような嘘を感じません。なのに、心に沁みる素敵な絵本になっています。画家のいしいつとむさんの心温まる画風のせいもあるでしょうけれど、なにより、作者自身が老親の介護を長期間体験し、子として家族として嘆きつつ、胸を痛めつつ、それでも最後には老親を愛おしむしかなかった深い思いが地盤になっているからこそ、この嘘のない、温かな世界を構築できたのだと思います。
この物語に登場する家族は、みな、いい人ばかりです。その中で、私は、おとなりの怒りん坊のおじさんがお気に入りでした。
怒りん坊は人間の一面に過ぎないとわかっていても、人というものは、そういう目立つ一面だけで、他人を判断してしまいがちです。
けれど、この物語は、そのような人の一面だけでなく、深く重層的で、時には意外に見える人の心のありようを見事に描いてくれます。
そういう意味で、この絵本は、人生の悲しみの深みや、些細な事に翻弄される感情を描きつつも、それでも消えない「人の存在の愛おしさ」そのものを感じさせる物語になっているのかもしれない。
理屈ではなく、説明ではなく、大きな嘘をつくこともなく、心に沁みる物語を書くのは、とても難しいけれど、書く前に、深く感じるものがあってこそ生まれる物語があります。それこそが、子どもの心にも大人の心にも沁みるこの絵本、『ばあばは、だいじょうぶ』なのです。

(こしみず りえこ/作家)



「ばあばは、だいじょうぶ」
橋章子/作
いしいつとむ/絵
本体価格1300円+税

嘘のない絵本『ばあばは、だいじょうぶ』

越水利江子

BOOK

自分を見守って
つてくれる存在あま
ん
き
み
こ

「なきむしに かんぱい！」
宮川ひろ／作
小泉のみ子／絵
本体価格1100円＋税

宮川ひろさんの「かんぱい！」シリーズが、ついに10冊になりました。『しっぱいに かんぱい!』から『うそつきに かんぱい!』『ずるやすみに かんぱい!』『わすれんぼうに かんぱい!』『けんかに かんぱい!』『0てんに かんぱい!』『ひいきに かんぱい!』『ないしょに かんぱい!』『あまのじゃくに かんぱい!』、そしてこの『なきむしに かんぱい!』です。どの本も、ドキドキしたり、ハラハラしたり、しょんぼりしたり、あれこれ迷っていると、どこからか「こういうこともあるのよ。これでいいのよ」という声^{てのひら}がして、あたたかな掌で背中をとんとんとんと静かにたたかれる読後感があるのです。

3年生になった咲が発熱のため、楽しみにしていた春の遠足に行けなくて大泣きするところで『なきむしに かんぱい!』の幕があがります。泣き寝入りをしている咲を見おろしている壁のお面の「おかめ」と「ひよっこ」が、心のビデオにスイッチを入れて、咲の泣きむし人生をふりかえり話しました。やがて熱もさがり、目を覚ました咲が、じいちゃんと並んで美味しいお弁当を食べるところで幕がおります。ほっとして本を閉じた時、読み手は自分を見守っている者の存在を近くに感じるのではないのでしょうか。どんな時にも、ちゃんと見守ってくれるなにかがある——そのことを感じる嬉しい1冊の誕生です。

(児童文学作家)

古田足日の代表作『おしいれのぼうけん』は時代を越えて、子どもたちを魅了している。

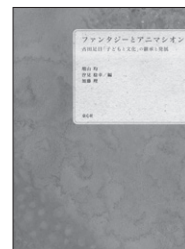
お昼寝をしないで騒いでいた、さとしとあきら。みずのせんせいにおしいれに入れられたふたりは、くらやみの中で、ねずみばあさんが迫ってくる怖さと向きあい、励ましあいながら冒険の世界に入っていく。おしいれの外では、子どもたちがハラハラ、ドキドキしながら、いつまでもおしいれから出てこない2人の様子に、こころを躍らせている……。

ごくありふれた子どもの生活の中に広がっているファンタジーとアニメーションの世界。古田はそれをみごとに描いている。古田は児童文学を通じて、子どもが育つとはどういうことか、文化はどのように人を育てていくのかを見つめ、子どもが育つ現代の社会・文化と格闘しながら、独自の作品を創作し続けてきた。

古田が書いた論文「子どもと文化」(1982)の継承と発展を課題としたこの新刊の書名を見て、児童文学領域の諸問題を扱った本と想像する人もいるかもしれない。しかし、ファンタジーもアニメーションも、決して児童文学や読書の世界に閉ざされた用語ではなく、人間と文化、人間と発達に深く結びついたキーワードである。

この書は、古田の児童文学作品の魅力の秘密を読み解くための必読書であると同時に、「子ども・文化とは」「子育て・教育とは」という問いに根源的な光を放つ問題提起の一書である。

(ましやま ひとし／早稲田大学文学学術院教授)



「ファンタジーとアニメーション
—古田足日「子どもと文化」
の継承と発展」
増山均、汐見稔幸、加藤理／編
本体価格2950円＋税

古田足日を継承し、
子どもと文化・
教育を考察する
増山均

BOOK

1月の新刊図書!

絵本・こどものひろば

ノボルくんと フラミンゴのつえ

昼田弥子/作
高島純/絵

本体価格1300円+税



おじいちゃんにつえを買ってくるよう頼まれたノボルくんは、財布をおとしちゃった。交番でフラミンゴのおまわりさんに出会い…。

単行本図書

火山列島・日本で 生きぬくための30章 —歴史・噴火・減災—

夏緑/著
末藤久美子/絵

本体価格3700円+税



日本列島は火山列島。活火山は110、そのうち常時観測火山は50。火山の成り立ちや噴火の仕組みを知ること生きの知恵を学ぼう。

ピーマン村のおともだち

きょうは たんじょうび

中川ひろたか/文
村上康成/絵

本体価格1300円+税



1年の間にいろんなことがありました。「おたんじょうびはなんかいあった?」「1かい」みんな1年に1つだけ、大きくなるんです。

展覧会
のお知らせ

童心社
創立60周年
記念

童心社60年展

—ずっと子どもと もっと子どもと—

1957年の創業以来出版してきた絵本と紙芝居から、貴重な原画や資料、立体展示など盛りだくさん。ぜひ、足をお運びください。

2017年3月18日[土]～4月9日[日]

10:00～19:00 (最終日は17:00まで) **入場無料**

銀座・教文館ビル (東京都中央区銀座4-5-1)

(9F ウェンライトホール / 6F ナルニアホール)

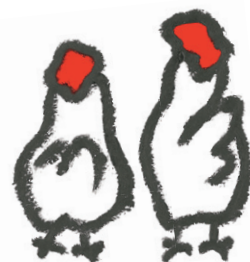
公募
のお知らせ

かみしばい作品 & 脚本募集!

紙芝居のさらなる可能性を追求するため、新しい作家の発掘を願い、創作紙芝居の作品・脚本を募集いたします。

募集期間: 2017年3月1日～2017年7月末日 (予定)

詳細は童心社ホームページへ
<http://www.doshinsha.co.jp>



イラスト/和歌山静子

あとがき

2017年1月15日発行 (毎月刊)
母のひろば 第632号
定価50円 (年600円 / 送料とも)
発行所: 童心の会
〒112-0011 東京都文京区千石4-6-6
株式会社童心社内
電話03 (5976) 4402
編集発行人: 大熊悟
童心社のホームページ:
<http://www.doshinsha.co.jp/>
フォーマットデザイン: bise inc.

定期購読のご案内

おハガキにてお申し込みください。下記QRコードからもお申し込みいただけます。見本誌(無料)と振込用紙をお送りいたします。

見本誌に同封されている振込用紙で購読料をお支払いいただけますと、手続き完了となります。購読料金は1年分600円(送料とも)。



●「座談会」興味深く、「空想世界を楽しめない子どもが増えている」「即座に反応が返ってくる絵本がもてはやされがち」等々、日頃感じさせられています。お話にどっぷり浸かって泣いたり笑ったり……そんな素敵なことはないと思うのですが、とにかく編集者としては有無を言わず「子ども自身のいのちが喜んで」くれる本を出していきたいものです。◎

●あけましておめでとうございます。今年、童心社は創業60周年を迎えます。創業10年以内に全体の9割以上の会社が廃業すると言われる中、半世紀以上続けられたのは、出版物に恵まれ、読者の皆さまに支えられてきたからこそ。感謝をこめて、教文館での童心社展や紙芝居作品の募集など節目の年ならではのイベントもおこないます。ご期待ください。◎